三河アララギ

２０２４年 令和６年２月 如月（きさらぎ）

二　月　号

第 七十一 巻　第 二 号

ニューヨーク日記（208）

http://blueshoe.copetin.com/

BlueCat, Shoe Lady

HAPPY NEW YEAR!

Blue Shoe Diaries

明けましておめでとうございます。マイアミからの素敵な初日の出です。この数年間は年末年始は日本で過ごしていたけど久しぶりにアメリカでのお正月。冬なのに気候の良い所なので少し不思議なクリスマスとお正月。でもせっかくお正月なのでここで手に入る材料でヘンテコなお節とお雑煮を作ってみました。新年の行事をしないとなんだか一年が始まらない気がしませんか？ 2024年良い年になりますように！

Happy New Year! This was the first sunrise, and it was perfect! For the past several years, we've been spending the holidays in Japan, but this year, we are welcoming the New Year in Miami. You forget that it's the middle of winter here, and spending Christmas and New Year's in warm weather feels surreal. I tried to keep the spirit of "Oshogatsu" by making an interpretation of osechi with local ingredients (and a few items brought from Japan). Wishing everyone a happy 2024.

目次

第七十一巻第二号（通巻八四二号）

表紙・菩提樹（1）
ニューヨーク日記(208)　Blue Shoe（2）
歌集　わが冬葵　御津　磯夫（4）
歌集「草々」　今泉　米子（5）
三河アララギ歌集Ⅴ　大須賀寿恵（6）
三河アララギ歌集Ⅴ　夏目　勝弘（7）
『歌集　八千代』　岡本八千代（8）
三河アララギ歌集Ⅴ　弓谷　久子（10）
クロッキー　今泉　由利（12）
吾が八十路　安藤　和代（14）
ポストに急ぐ　山口千惠子（16）
槙の実　杉浦恵美子（18）
年の瀬　伊藤　忠男（20）
通行止　白井　信昭（22）
成人の日富士遙か　矢崎　直人（24）
『ことよせ』　いーはとぶ　稲吉　友江（26）
鈴木美耶子（26）
伊藤　晴江（27）
牧原　正枝（27）
森　厚子（28）
水野　絹子（28）
牧原　規恵（29）
大武　智子（29）
現代学生百人一首　東洋大学
恩田　優奈（30）
澤田　拓実（30）
赤間　夏妃（30）
川本　美瑛（30）
佐藤　杏菜（31）
橋本　大和（31）
大竹　恭平（31）
石川　胡桃（31）
『俳句』
植村　公女（32）
木村　歩歩（32）
今泉　如雲（32）
矢崎　直人（33）
今泉　由利（33）
川口カルチャー受講者自作自詠俳句集（34）
五感を澄ませば(20)　杉浦恵美子（36）
附録（二十）　矢崎　直人（38）
『安寧を願う』　中屋　保之（40）
『酔いの徒然』（142）　丸山酔宵子（42）
「地球は一つ」　高橋　育郎（44）
絹の話（159）　今泉　雅勝（46）
「江上浩二の独り言」　江上　浩二（48）
初狩便り27　花野みぷり（50）
本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬
本田　勇気（52）
康鍼治療院　玄　翁（54）
『令和六年賀詞交換に作あり』
殿山　木風（56）
編集室だより　今泉　由利（58）
「三河アララギ」について（60）

歌集　わが冬葵

御津磯夫

草の中に失せし手なれの木鋏を探さむすべのあれこれもなし

草深き中に落としし木鋏を寶のごとくわが戀ひやまず

カクタスの芽を喰ひあらすは蝸牛と知れども怒るほどにもあらず

いさぎよき杉菜の季のはやく過ぎて十藥蛇床子の盛り上りくる

行平といふものいまだ殘りゐて妻は買ひとる老いのすさびに

昔むかしの屋敷境の石一つ玉葱まろき隣畑にあり

まひるまの光り澄みたる一隅にこゑあつまりて鳴く雨蛙

黑々と妖しく立ちて崩れゆくかをりもなけれこんにやくの花

原因不明とわがいひながら九十五歳の左手首の腫れに濕布す

刳船（くりふね）の棚無小船よりいくらかはたくみ加へしボウチョウの船

歌集「草々」

今泉米子

いつしかに右の手首の鈍痛を忘れて明細書かきつづけ居り

呆けたるは呆けたるままにと聞きながら朝餉の海苔をわがやきてをり

常念の雪はあたらしまむかへる三階の窓あけて髪梳く

サルヲガセまつはりなびくを見下しになほほつづきゆく本郷村林道

落葉松の冬木となりてくろぐろとなびけるさまも老いてわが見つ

停まりし車窓に近く黒竹の一叢立ちは伊那のあたりか

夜の雨降りゐる三河へ歸り來ぬ三年味噌を重たくさげて

あはただしく賣店に求めしお六櫛母の遺しし油に浸す

秋葉の幟白くはためく寺の前吉良の冬日の光あつまる

大雅描く襖の松のうすれつつ檀家のなきと云ふもしたしき

三河アララギ歌集Ⅴ

大須賀寿恵

あはあはと夕茜残る西の空を二羽の五位鷺もつれ合ひゆく

蚊遣香尽きたるのちの暫くを漂ふ煙の中に覚めをり

手の震へ震へて止まざる吾が手にて明日の歌会の歌稿書き終ふ

茂りたる棟は風にうねりつつ梅雨明けま近き雨降りしきる

嫌々と出でゆくくせの母親教室今日穿く靴を磨きなどして

一日降りて夕べ止みたる西空に没つるたまゆらの光ひとすじ

方三尺の窓より見ゆるばかりにて曇る北空のことは分らず

黄昏を海の方へとくだりゆく鋭きこゑの二羽の五位鷺

木蓮を覆ひ尽くして蔓の先みな天にむかふひんばうかづら

腰椎のギブスコルセット外したり外したるこのしばし涼しき

三河アララギ歌集Ⅴ

夏目勝弘

日に日に川の中州の広くなる冬の日差しを吸ひ込みながら

丸まりて寝ねゐる犬が悲しげに鳴きをり夢を見てゐるならむ

一日を家に籠りて過ごしたり身近に騒ぐ猫憎みつつ

昼寝より覚めて時の間思ふこと忘れてゐたる遠きことばかり

生き死にも〇か×かで決めてしまふ短絡といはむ進化といはむ

偏差値といへる数字に学生等は脅ゆるとみるは我のみなのか

冬の日の一日照れば我が今日の風呂は沸くなりああ有難や

太陽にて沸きたる風呂に浴みをり一日を無駄にせしを悔ひつつ

白き飯食ひたきゆゑに歩みし道今日は歩むその叔父の葬に

塩つけて食ひし瓜の味今にあり野田城駅より遠く歩みきて

『歌集　八千代』

蒲郡　岡本八千代

太き毛糸細き毛糸を組み合はせ吾子の毛布をまた編み始む

行きし人なき雪の路一すじに我らいつしか永昌寺につきぬ

踵低きわが靴底に枯杉の落葉は雪とかたまりて付く

此の朝早くも誰か来たるらしき雪の永昌寺に一つ足あと

雪の馬籠越えゆくわれにバスの輪のチェーンは橇の鈴の如く鳴る

夜鳥の主人よりわれに雪解けの俳句を書きしはがき着きたり

人生のわれの話に杭ひて教室より出でゆきし良三

咲き初めのポリアンサスの小さき鉢抱へて夕べの電車に乗りぬ

ポリアンサスの赤き小さき鉢を置く夜半長く起きゐる吾子の机に

春の夕べのはうれん草を茹でてをり口笛を吹く吾子を叱らず

春の雨降れる今宵はひさしぶりにブラッシュパクトを買ひに出でゆく

若き日のわが教へぶりを少しほめて十八年前の生徒帰りてゆきぬ

農林高校のカーネーションの温室を巡りつつ半日受験生を待つ

退職の君が植ゑたまひし藤咲きぬ短き房の白藤の花

房短き白藤ゆるる窓近く婦人部長のわれは席とる

三河アララギ歌集Ⅴ

豊川　弓谷久子

大恩寺の椎の緑に対ふ縁に夫の好める籐椅子置かむ

甲少し膨れてゐるかと押して見る動かぬ夫の冷たき左足

サッカー地の半袖パジャマと着替へさす誰よりも遅き夫の衣更へ

常臥の夫の布団の上に敷かむ藺草の匂ふ寝莫蓙購ひたり

癒えし夢見つつ眠るか昼寝の夫曲りし指を伸ばさむとせり

我よりも白く柔かき手となりし夫の動かぬ手の爪を切る

埃払ひてまた納め置く足萎えとなりしわが夫の黒き革の靴

わが夫と同じ病より甦りし人の一冊をまた読み返へす

暁の一ときの夢にてまざまざと夫は立ち上がり歩き行きたり

幼子に戻りし夫は子の土産のま白き大き綿菓子喜ぶ

無口なる夫となりたり癒ゆる無き脳血栓を十二年病みて

痩せやせし夫を立たせむとする時に我には重しずつしりとして

食欲無き夫に食べさせむと紅き苺を瑠璃色ガラスの小鉢に盛りぬ

常臥の夫に見せむと拾ひあぐ風に飛び来し桜の小枝

一日だけでも夫の手足と代りたしと身代り地蔵を我は拝みぬ

クロッキー

東京　今泉由利

６Ｂの鉛筆の芯を太く丸くいまし始むる人間の姿クロッキータイム

もう少し残るばかりの私の寿命やうやく気付きぬこの頃のこと

養生をすれば人間は百歳までは生きられるとカロチン・ビタミンＣを加へて

人参のカロチン食むを楽しみぬ抗酸化作用細菌抵抗作用

人の脳細胞は約一四〇億個沢山残っていることとする

一つ日に三十粒の大豆を食めよ大豆サポニン私を守る

地球なる位置情報の画像よりニューヨークに玉由マイアミに由野

若返りをもたらすといふ胡麻アフリカサバンナより縄文期に渡来

体内の老化物を洗い流し老化を防ぐ血流向上の水

十両を薮柑子（やぶこうじ）百両を唐橘（からたちばな）千両万両朱実赤実の究極の赤

川の水と海の水と相ひ会ふことよ地球出来こし歴史を込めて

うっすらと汗をかく程の運動もなかなかしない冬日の日々を

父よ母よ受け継ぐ「三河アララギ」よ思い出ぎっしり未来へ誘う

都会道の片隅のムラサキシキブのピンクの実ムラサキシキブの紫の実

心地よく住みをり恵比寿の中空に見上げてここは飛行機の道

吾が八十路

豊川　安藤和代

客もなき電話もなき日一羽いる庭の雀に声かけており

根付きいしパンジービオラに冬の陽を当てればなぜか恥らいて見ゆ

息病めば命の尊さ尚更に庭草抜くもためらいており

吾れつくる粥を半分残しまま入院す息子よ澄む朝を泣く

甘党の息子の好きなカステラも袋のままで五日が過ぎぬ

柱とも杖とも思う息子ゆえ己が命とかえてと願う

八十の吾れを残して旅立てる息子の心内知りて又泣く

子の役目親の役目もせぬままに息子(こ)は旅立てり五十五才よ

数え児に送られ息子の幸せの満面に笑む遺影を抱く

草ですら根を張り葉を出し花咲かす生きると言うは吾れより強し

来春は産れくる初孫の顔も見ず逝きし息子にまたも涙す

温かき飲みものほしき今朝の冷え息子に温き茶を供えたり

駅前の雑踏の中亡き息子に似し人行くをズーと目で追う

逆縁を泣くな喚くな吾が人生枯れ木にさえも芽吹く枝あり

次つぎと苦労の山はせまり来て頑張り登る吾が八十路坂

ポストに急ぐ

豊川　山口千惠子

郵便の今日の集配に間に合ふべし歌稿を出さむポストに急ぐ

黄葉する公孫樹の落葉吹かれ来て一つ所にすべて止まる

一面の休耕田に大豆実る冬になりゆく田の中の道

痛む足庇ひつつ歩む夫と行く日課にしてゐる鎮守の社へ

話すこと何もなき日の夫との散歩大豆稔れる田の中の道

石段に腰掛けしばし休みゐる冬の日あまねし鎮守の社に

冬になる今日の日射しの温かし大豆稔れる休耕田の道

空高く咲き続けたる皇帝ダリア淡紫の花びら散らす

幾片の淡紫の花びらを土に落としぬ皇帝ダリア

取り入れの済みたる大豆の田の中に舞ひ降りあさる鴉の大群

突然に羽音をたてて降り立ちぬ青鷺一羽ひつじ田の中

芽生えくる無数の双葉プランターの土に見つけし朝楽しき

プランターの土に芽生えゐる青き芽は春に花咲くシレネなるべし

久々の雨のち晴れの日の温くし冬に咲きつぐ真白のダチュラ

手作りし注連縄届け下されし人を偲びぬ今年の師走も

槙の実

蒲郡　杉浦恵美子

お供して姫塚を見に行きし日を思ひ出しをり小春日和に

生垣に槙の木の実が見え隠れ思はず採りて口に含みぬ

槙の実は緑と赤との双子にて見かけ愛らし甘くはないが

槙の実を思はず採れるお転婆を我が師優しく微笑まる

姫塚の由来我が師はよどみなし遥かな昔の見知らぬ人の名

姫塚に槙の実供へて辞去しけり我が師も以来訪ねざりけむ

いざ行かん友に教はる山奥のカフェにこれまた新しき友と

十三種の野菜の入ったカレーにてそれぞれ食感残してゐたり

このカフェは今月末に閉店ぞ野菜カレーは旨くもラスト

美味しいねなぜやめちゃうの何気ない会話が我には却って新鮮

山奥のカフェと雖も本宮山ぐるっと半周作手村にて

さは云へど海辺の我にしてみればこんな山奥これも三河か

知ってゐるつもりなれどもなかなかに知らぬことありふるさとなども

蒲郡蜜柑箱入娘がこんなにも美味しいものとはつひぞ知らざり

箱入娘蜜柑剪りたる作業せし友が数個を手渡し呉れし

年の瀬

大阪　伊藤忠男

冬晴れに雲一つとて見当たらず冷えた心に染みる青空

山すそに霞たなびき春模様過ごしやすさに年の瀬忘るる

暖かく過ごしやすきは助かるが年末らしさに欠けるが寂し

水仙の蕾ふくらみ間もなくか庭を彩る朝な夕なに

金剛の山に登りた若き頃今は懐かしお汁粉の味

ホトトギス間違えたのか鳴き声が微かに聞こえる夜明け時

寒中の見舞い出すには早すぎか寒さ身に染む時はいつなり

あれこれと不満並べる今の今寒波襲えばそれまた困る

コート着て襟立て駅に向かうとて春の陽気に手荷物となる

恒例の年末行事を中止して体厭うは初めてのこと

足腰の衰え気付く年の暮れ手摺伝いに上る階段

医療費をまとめ今年の健康度増えた分だけ歳取りたるや

流れゆく浮雲追いて羨まし風の吹くまま気の向くままに

久しぶり友の訪ねに胸躍る昔の話題活気あるなり

友の顔皺に白髪増えたれど口舌前と変わりなしなり

通行止

豊川　白井信昭

六月の豪雨明けなりき渋滞のＲ２３彷彿（ほうふつ）とさせる

妻通う市民病院渋滞に予約時間の繰り下げ叶いぬ

バイパスの渋滞を避けここよりはＲ２３回り道ゆく

イスラエルのハマス掃討のガザ地区住民の死者ふえゆくばかり

空爆は避難所に及びラファ病院さながら修羅場となせり

双方の一刻も早き停戦と人質解放またるるいらだち

師走三日年に一度の地区清掃われの朝寝に妻は出でゆく

庭中にさつきつつじ移し終えて半年余り色づく黄葉（もみぢ）

菊の花角口生垣黄と白咲き混じりゆく薄茶と桃

一本の平戸つつじ生垣に陽の当たるとこ黄葉（もみ）だす黄葉（もみぢ）

穏やかに凪ぎ渡る空遠面にも黄砂に霞む山並み見ゆる

角口のモッコウバラに干す洗い物われ払いてより家に取り込む

改修の今なほ続け入出口青き砕石打ち剥（は）がし取る

入出口門塀柱に一本の単管パイプ打ち剥がせたり

通行止の豊橋ＢＰ（バイパス）解除日のひと月余り長かりきとも

成人の日富士遙か

埼玉　矢崎直人

三が日地震に事故にニュースみる騒々しかり正月なりき

直せども直せども地震能登の町繰り返す地震何故また能登に

原型を留めぬ街の冬の空キーウにガザに北陸の能登

震災の準備は如何に出来てるか他所事思わず見直すべきか

貧困の定義を如何に捉えるか子どもの貧困未来の貧困

ますますの社会福祉の在り方の基礎に人間思い出しなん

しみる朝生きてる息を吸い込んで吐いては吸って吸っては吐いて

ホウレン草農協安い立話出来る老女の平和な町の

犬歩くリードを落とし気が付かない老女の横を同じペースで

誰のを真似を出来ない人生の私は私を生きる人生

想ひとか笑ひに願ひ書初め会人それぞれの字の顔に見る

えんぴつをうまく握る子小春の子一歳の子にみえぬ手つきの

一歳児父をちち呼ぶ友の子の発語を聞きぬ初句会にて

初場所のはっきょい迎えのバスの中古利根句会の新年会の

天晴や成人の日の富士遙か遙かに富士のなりの厳か

『ことよせ』

西浦公民館　いーはとぶ

稲吉友江

これと言ふ事も無きのに電話せむあなたの優しき声きく秋の夜

擦れ違ふ青年の香の爽やかきミントの香り仄かただよふ

評判の映画「ゴジラ」を観にゆかむこの頃なぜか刺激ほしくて

鈴木美耶子

診察待つ隣の媼は語りかく百歳までに三つと指にて

この媼八千代先生と同い年杖つきゆつくり帰りゆかれリ

クリニックを杖つき出づる媼ひとりなほなほ重ぬる八千代先生

亡き師よりの着信知らす電話番号目を見開きて電話をとりぬ

ひとつづつ亡き師の思ひ出語りたり電話の向かうに師の娘さん

娘さんは涙声にて言はれたり「私の知らない母を知りました」

伊藤晴江

この夜更け庭のあかりが灯りたりアライグマ二匹メダカの鉢に

夕暮れて捕獲檻にはソース味の肉をつるせりアライグマここぞ

捕獲檻にうなりてゐるは野良猫か保護動物は放せの指導

牧原正枝

千歳飴提げし私の写真見て「いつも笑ってたね」と笑まふ姉たち
鏡見て「かわいい」といふ孫真似てつぶやく七歳（ななつ）の吾の写真に
君のくれし野ボタン散りにき紫のビロード幾ひら花びんの下に

森　厚子

すれ違ふ車さへ無き山道に我が物顔の猿が数匹
白骨へと続く山道黄葉に包まれ走る我も染まりぬ
まう二度と来られぬだらう天守閣息あげ手摺に縋りて登る

水野絹子

長年の夢かなひたり比叡山眼下に琵琶湖の青く広ごる
延暦寺古き時代に思ひ寄せ心を込めて鐘一つ打つ
法然の小さき庵訪ねたり修行の厳しさふと感じつつ

牧原規惠

換気扇洗ひて脂の抜け落ちし掌に擦り込みぬシアバタークリーム
悲しくてやりきれないよ　I must forget him forgot him
山茶花の植え込みのある理髪店見え来てわれは切なくなりぬ

大武智子

現代学生百人一首

東洋大学

風鈴の夏を連れだすその音は時をまたいで心やすらぐ

東京農業大学第一高等学校1年　**恩田　優奈**

ネット授業我が家のアイドルおでましだネコが届けた和やかな昼

練馬区立関中学校2年　**澤田　拓実**

時計地図写真音楽お財布も気づけばみんなスマホの中に

普連土学園中学校2年　**赤間　夏妃**

マスク消えみんなのかおが見えるときはなせるのかな今まで通り

普連土学園中学校2年　**川本　美瑛**

いびきかき寝てる愛犬ながめると実感したよ飼い主に似る

文京学院大学女子中学校1年　**佐藤　杏菜**

ズーム中ミュート忘れて歌うたいさびしい授業わらいあふれた

明星高等学校2年　**橋本　大和**

難問を解いたチョークの消し残しどこかアイツのやさしさがある

神奈川県立神奈川総合産業高等学校3年　**大竹　恭平**

文化祭二年連続オンライン慣らされていくこの空気感

慶應義塾湘南藤沢高等部2年　**石川　胡桃**

『俳句』

二人ゐるふたつの心沙羅の花　植村公女

足音を確かめたくて落葉踏む

生き延びて12月8日又向う

木枯らしに火災報知器電池切れ　木村歩歩

舞台まえ発声練習息白し

峠下寒餅美味し茶屋一つ

夕時のモネの光に冴える湖（うみ）

道遠しさらば昴よ吾も往く

冬ぬくし日本シードル発祥地　今泉如雲

風呂吹や津軽の土の碗なると
糀屋の糀カレーと甘酒と

えんぴつをうまく握る子小春空
野菜の値の立ち話し出る小春空
小春空かしこき犬のおともかな
書初めや紙一杯に大き文字
天晴や成人の日の富士遙か

矢崎直人

大根の千には足らぬ千六本
午後の陽の長く伸びきて日向ぼこ
木漏れ日を集めて真白お茶の花
光とふ素粒子集む日向ぼこ
目を閉じてなほまぶしかり真冬陽の

今泉由利

川口カルチャー受講者自作自詠俳句集

木風

歳末のそれはそれなり丸い月
年の瀬の月も別るる雲の間に
冨士を仰ぎ霜踏みしめて真善美
元旦にあろう事かとテレビを見
記念樹の初柚二つ孫七つ

雄山

青柿や風に吹かれて秋間近
山道に音もなく散る落葉かな
親子熊柿ほしさに里下る
パソコンで仕事どこでも出来る今
秋の里赤黄緑の信号機
秋風が岩に感じる瀞の川

山茶花や散る花びらの夕映へる
立冬や布団の嵩に猫もぐる
白桔梗五角のつぼみふくらめり

つね子

山笑う吟の奥義は何処(いずこ)かな

金子

我(われ)を見(み)る山茶花(さざんか)の散(ち)る夜空(よぞら)かな

秋風

電車道金柑(でんしゃみちきんかん)たわわ秋日和(あきびより)

秋山

榎の実ぼとりと落ちた昼下り
海のもの山のものあり今年酒
草々に色な風の吹くことよ
ガラス越し景色の内に冬のあり
昆布〆の鮮食べ頃新走り

今泉由利

五感を澄ませば（20）

杉浦恵美子

それはちがう

・ちがくて　（ちがって？）
・ちがうくて　（ちがっていて？）
・ちがくない　（ちがわない？）
・ちげーよ　（ちがうよ？）
・ちがかった　（ちがった？）
・ちがうかった　（ちがっていた？）

これらは最近テレビ、インスタグラム、歌詞の字幕などで実際見聞きし、採集したものです。

皆さんはこれらを耳にしてどう感じますか。

「何とも思わない」または「最近流行の若者言葉かな。カッコ良い」と感じられたら貴方は若い！

私はこの言葉を聞く度に「チッ」と思います。

なぜなら文法的に間違っているから。

この表現の基本形である「ちがう」はワ（ア）行五段動詞。「ちが｜ぉわ・い・う・う・え・え」と活用。そのため「ちがくて」の「く」は活用表の中には存在しません。

ではなぜこのような言い方をするのか。

ここからは私の考察です。

動詞「ちがう」の連用形「ちがい」は、名詞化して多用されています。読み・書き・流し・渡りなどのように。

さらに語末の「い」が形容詞ク活用の基本形の語末と同じ（よい・わるい・かわいいなど）である上、「ちがう」という語の意味は「ちがっているという状態」を表し、それは形容詞の性質である「物事の性質や状態をあらわす」に通じるため、基本形「ちがい」という形容詞が存在すると勘違いした結果ではないかと。

因みに動詞の性質は「物事の動作・作用・存在を表す」ですが、ほとんどはその名が表すように動作のイメージ。昔何かのキャッチコピーに「若さは動詞！」というのがあって、言い得て妙と感心しましたっけ。

関連して「ありなし」という連語は対義語である上、ありが存在するという意味の動詞、なしがないという状

態の形容詞で二つの品詞の性質を端的に表していると思いませんか。

脱線しました。

つまり「ちがう」は状態でなく「異なる、差がある」存在？。ちょっと苦しい説明。

しかしこの表現が世間で広まっている以上何らかの見解があるだろうとネットで検索したら沢山ありました。

おかしい日本語として説明しているものがほとんどですが、なんと「大辞林」４版（２０１９年刊）に

ちがくて【違くて】〔連語〕〔動詞「違う」を形容詞としてとらえ、その連用形「ちがく」に接続助詞「て」の付いたもの。近年の若者言葉〕違って。違っていて。

と載っていると言うのです。この例に限らず言葉は常に変化して行くもの。今だって文法的に間違っていようが、普通に使われている言葉は山ほどあります。敬語の使い方などもその一例。

いやはや今後この表現が市民権を得ていくかどうかはわかりませんが、今のところ放送用語などでは相応しくないとされています。ちょっと安心。

さて「ちがい」ばかり見てきたところで連想するのは**金子みすゞ**の詩「**私と小鳥と鈴と**」の有名なフレーズ

鈴と、小鳥と、それから私、
みんなちがって、みんないい。

平易な言葉なのに奥深いこの詩を鑑賞した後「みんなちがくて」と言い換えてみたらなんと軽々しいことかと思われませんか。

若き日と違ひて違ひを気にもせず今は我が道かたくなまでに

附　録（二十）

矢　崎　直　人

えんぴつをうまく握る子小春空

友だち夫妻と一歳の子と一緒に俳句を作る会をしています。テーブルに紙を広げて俳句を作っていると、その子も一緒にノートを広げてえんぴつを握って動かしています。その手つきはとても一歳児にはみえないくらい堂々としていて得意げな顔に将来が楽しみです。

えんぴつをうまく握る子得意げに一歳の子にみえぬ手つきの

野菜の値の立ち話し出る小春空

正月から北陸で大地震がありました。二週間以上が経過した現在も復興の目途がたっていません。休みの日にかねてより行きたいと思っていた岩槻の久伊豆神社に行きました。五日で新年の初詣の参拝客も家族よりは職場の人が来ているようでした。

岩槻駅から往復徒歩で二十分程歩きました。おばあさんたちの立話が耳に入って来ました。農協のホウレン草の

値段が安いけど買ったかというたわいないの話でした。

ホウレン草農協安い立話出来る老女の平和な町の

小春空かしこき犬のおともかな

かしこい犬を見ました。買い物袋を手に提げたおばあさんが犬と一緒に歩いています。よく見るとおばあさんの犬はおばあさんと一緒に歩いてはいますが、その手には犬の首輪に付けられたリードが握られていません。と思っていたら、突然おばあさんが「あっ、いけない」と犬が引っ張っていたリードを拾い何事もなかったかのように歩いていきました。

犬歩くリードを落とし気が付かない老女の横を同じペースで

被災地にはやく日常が戻る日を願います。

『今年もまた　今年こそは』

中屋保之

宝船

藤野君山

寿海波平かにして紅旭鮮かなり　遥かに看る宝字錦帆の懸るを
同乗の七福皆笑を含む　知る是れ金銀珠玉の舟

「辰年」である。字としては「龍」や「竜」があるが、干支の場合は「辰」がよい。〝たつどし〟と言うが〝りゅうどし〟とは言わない。干支とは、十干と十二支の組み合わせのことをいう。十干は、古代中国（紀元前17世紀に興った「殷」という考古学上実在が確認されている中国大陸最古の王朝）の陰陽五行説（宇宙のすべては陰・陽と、水・金・土・火・木の五つに分けられるとする思想）が起源とされる。一説によるとこの時代、太陽は10個存在しており、それらが順に日を巡らせて月日を把握しているとされた。陰陽では、この十干（甲・乙・丙・丁・戊・己・庚・辛・壬・葵）を兄弟（＝えと）に擬して、兄とするものを「え」、弟を「と」と称するようになったそうである。

これに、五行思想をその構成順『甲・乙＝木』『丙・丁＝火』『戊・己＝土』『庚・辛＝金』『壬・葵＝水』を当てはめてゆくと「甲〝き〟の兄＝きのえ、乙〝き〟の弟＝きのと」、「丙〝ひ〟の兄＝ひのえ、丁〝ひ〟の弟＝ひのと」…〝丙午の女は気が強い〟などというアレである。因みに、「甲乙丙丁簿記更新時期」が十干を覚える秘訣だとか。

古代中国では、「日」を数えるには十干、「月」を数えるには十二支を使用していたと伝わり、時代が下るにつれ「年」にも及ぶようになったとの事であるが、十二支の元々は木星の位置を示すための呼称だったようで、この星が12年で天空を一周することからこれを十二分して動物名をあてはめたとの説がある。その動物名については、さしたる根拠はなさそうである。ただ、これらの思想には、世の森羅万象、生きとし生けるものの芽吹きから成長し、やがて衰退に到るまでの過程が表されているからであろうか、やがて、暦や時間、方角など幅広い分野に適用されてゆき、飛鳥時代には日本にも伝わっていたそうである。

とにもかくにも「辰年」である。「辰」＝龍は十二支の中で唯一想像上の動物で、古来〝火除け〟の守護神として崇められている。深川が江戸の辰巳（東南）の方向にあったため、当時の深川芸者衆は「辰巳芸者」と呼ばれ「粋（いき）」の象徴ともなった。また、「辰の刻」は現代では午前八時前後、ちょうど朝のラッシュ時に該当し活気みなぎる頃に差し掛かる時間帯である。中国の古典『易経』に、「雲龍風虎（雲は龍に従い、風は虎に従う）」がある。優れた人物や英雄がその偉大さに相応しい場所や状況に現れるのだそうな。今年がそんな一年になることを願う。

ふりつもるみ雪にたへていろかへぬ
松ぞををしき人もかくあれ

昭和天皇　御製

『酔いの徒然』（一四二）

丸山酔宵子

『モロッコ・ドバイ・アブダビを旅して【Ⅱ】』

フェズからいよいよアトラス山脈を越えて砂漠の玄関口、エルフードへ向かう。

アトラス山脈はアフリカ北西部に位置し、大西洋と地中海の海岸線それとサハラ砂漠を隔てていて、モロッコ、アルジェリア、チュニジアにまたがる全長約２５００キロにもおよぶ大山脈である。多彩な地形や変化する気候に加え、さまざまな野生動物が生息し、モロッコの原住民であるベルベル人の村が点在し、山を切り裂くように渓谷が聳え立っている。

赤土の雄大な平原はグランドキャニオンにも似ていて、オリーブ畑が延々と続いている。因みにモロッコのオリーブの生産量は世界6位。また、広がる平原にはアーモンドやリンゴも植えられている。

渓谷を過ぎると赤土の平原が続き、その途中には堅牢な要塞（カスバ）が威容を誇っている。カスバの近くには、ナツメヤシ（デイツ）の樹々に囲まれたオアシスがある。

灼熱の太陽浴びてカスバ行く

赤土のカスバを照らす秋夕焼

酔宵子

陽もたっぷり暮れて、やっとサハラ砂漠の玄関口であるエルフードのホテルに到着する。世界のサハリ砂漠観光客をもてなすホテル　ル・ザットは大きなプールのあるナツメヤシに囲まれたハワイを思わせるコテージ風リゾートホテル。バーで一献とは思ったのであるが、明朝のサハリ砂漠の日の出を見るためには、早朝４時出発ということで即座に睡眠準備。今回の旅行のメインイベントである興奮を冷ますため、持参のウイスキーで強制的睡眠である。

果たして寝たのかどうか、時計を見ればまだ3時半過ぎ、ベッドから跳ね起きて、４時集合のホテル正面玄関へ。そこには４ＷＤランドローバーが待ち構えていて、只管、真っ暗闇の中を、ラクダが待つ砂漠の玄関口メルズーカへと向かったのである。

空を見れば、満天の星の中に北斗七星が輝き、オリオン座が手に届くように目の前に広がっている。

秋の星
サハラの夜明け明けんとす

暮れの秋サハラの空にオリオン座
酔宵子

真っ暗闇の中に忽然と薄い光群が現れ、駱駝たちが足を折り曲げて待っている。因みにサハラ砂漠の駱駝は「ヒトコブラクダ」で、熱さに強いタイプで、「フタコブラクダ」はカスピ海から中央アジア、モンゴルに生息し、ヒトコブラクダと比べて低温での適性がある。

いよいよ、生涯初の駱駝に乗っての砂漠への挑戦である。駱駝使の指示に従い駱駝にまたがると、するすると起き上がり、「うあー高いこと高いこと！」いよいよサハラ砂漠への出発である。

駱駝使が巧みに真っ暗闇を進んでいくうちに、前方の地平線の奥から光が見えてきて、それが徐々に光輪となって広がってくるが、まだ、太陽本体は全く顔を出していない。駱駝使は躊躇なくある目的地に向かって駱駝を操り、小高い台地で止まったのである。

「アーッ・・・・・！日の出だ・・・」

日輪が昇ってきて、漆黒の闇に光が当たってくる。その日輪の輪がみるみる大きく広がってきて、太陽が頭を出してくる。

漆黒の空に朝日が昇る秋

冷気刺すサハラの日の出遥かなり
酔宵子

このために長年熱望し待ち望んだ瞬間だが、将に一瞬ではあるが言い尽くせない感動である。

ふと、横を見ると、敬虔なイスラム教徒である駱駝使は、絨毯を砂漠に敷いて、日の出に向かってのコーランの祈りである。

晩秋の朝日に映える駱駝の背
酔宵子

地球は一つ

高橋育郎

地球は一つ　地球はまるい
海は青いよ　陸地はみどり
おお　なんと美しい　エメラルドグリーンのこの地球
なんと美しい星でしょう
十五夜お月さんも　うれしそうに見ています

あんなにも美しい星を　こわしたくありませんね
美しく保つのも　人間の心がけ次第です
私は言いたいです
もう戦争は二度としないようにしましょう　戦争は愚かです

美しくかけがえのない　この星を　戦争は壊してしまいます
世界中の若い皆さん　平和の尊さを学びましょう
この素晴らしい星を作った創造主の神様に誓いましょう
二度と戦争はくりかえさないと

夕焼け小焼けで日が暮れて　山のお寺の鐘が鳴る
菜の花畑の畦道を　お手々つないで　帰りましょう
カエルが鳴くから　帰えろう
一番星に手を振って　さよなら　さよなら　またあした
鐘の響きは　平和の響き　カラスも一緒にねぐらに帰る
みんな元気で　またあした

絹の話（159）

「アトリエトレビ」今　泉　雅　勝

絹の来た道　紫式部の時代

平安時代中期の日本の状況

平安時代中期は遣唐使が廃止され100年近くなり、唐の文物の模倣から日本の気候風土慣習（座る文化等）、美意識が取り入れられた生活用様式（十二単等）になって来た華やいだ時代です。

国内の律令制度が荘園の拡大などで崩れはじめ、天皇の血を引く平将門や藤原純友の乱などの武士の台頭が目覚ましくなって来ていました。200人ばかりの貴族専横の時代で、寝殿造りの家に住み、米を食べ絹を纏って栄耀栄華を極め、全国の人口500万人庶民多くは朝廷、寺社、荘園主等の所有物での多くが未だに竪穴式住居住み、稗や粟等の雑穀食が日常という生活格差は顧みられませんでした。税（租庸調）に耐えられなくなると、税の軽い荘園や寺社領などに逃散していました。

特に支配層の生活を律したのは陰陽道（安倍晴明）で、早朝明けやらぬうちに北斗7星に祈り、占いで日々の生活の些事まで律され、方違（かたたがえ）等をして出仕していました。平均寿命は肺結核、脚気、糖尿病（貴族）などが蔓延し男子32～4歳、女子27歳前後でした。

織部司と高級織物を織った人々

貴族の高級絹織物の錦、綾、羅などは大宝律令により大蔵省の織部司が掌握し、織部司は畿内に染戸（そめへ）（渡来人？）と称される錦綾織、呉服部、河内広絹織人などの特殊な織物をする人達を集団別に570戸余りを差配して、貴族の装束の織り、染め、縫製を担っていました。

これらの技術の習得は簡単ではなかったので世襲が義務付けられていて、彼らは挑文師（あやとりのしょう）と呼ばれ、錦、綾、羅、等の文様の作成とその技術指導を行っていました。一方、大蔵省の指示で各国の国司を通して郡司の元に出向し、機織り館を建て、現地の人達を技術指導して、その製品を織部司に送っていました。就労した人々にとっては日常生活の麻布とは全くレベルの違う物で、庶民にはその技術の習得は至難の技であったと思われます。

それまでは各地から糸を朝廷に送っていましたが、織物も送る様になったのは著しい進歩と言えるでしょう。

平安中期になってやっと日本人の手で高級織物が出来る様になったのです。

西陣織の始まり

平安時代中期には織部司に差配されない織物集団がいました。彼らの祖先は応神天皇（4世紀）の招聘で百済から渡来した秦氏（秦から百済に逃散した織物等の技術集団）で、九州豊後方面で力を蓄え京都太秦（うずまさ）に移り、綾織、錦など高度な織物を宮中に収めた人達です。

彼らは織部司には拘束されない自由人で、宋などから積極的に新しい織物技術を導入し貴族達の新しい物への需要を満たし、織部司を凌ぐ勢いを示す様になりました。彼らは宮中の支配から距離を置いている神社、仏閣などの重厚な装飾物を手掛ける一方、荘園領主達に新たなデザインなどの染織物を納める様になりました。貴族の中には技術者を自邸に招いて密かに目新しい物づくりに傾注する人も多々ありました。

この織物集団が時代の紆余曲折を経て応仁の乱後、西軍の陣地跡に集まって、今日の西陣を形成して来たのです。古墳時代以来西陣の染織界に果たした役割は日本文化の発展に大きく貢献したと言えるでしょう。

平安時代の繭と保存

平安時代の寝殿造りの住まいでは光の明暗で自分の装束がどの様に映るか大切な関心事でした。

平安時代の繭は現在の繭よりかなり小さく、現在宮中で養蚕されている小石丸という種類の繭に近いと言われています。小石丸は現在の繭よりかなり糸が細くしなやかで艶のある織物であったであろうと思われます。

絹糸は生繭（繭の中の蛹が生きている）から糸を揚げたものが最も艶が良いと言われます。

では、当時この繭の保存はどうしたのでしょうか。

生繭の期間は1週間ほどで短いので、ほとんどの繭は天日干しで中の蛹を乾燥させ、いつでも煮繭出来る様にしていましたが、少しでも生繭に近い艶を残す為、塩蔵という方法が考案されたと思われます。

塩蔵の糸は篝火や行灯の光などで妖艶な艶を放つ事がわかり、その方法が密かに伝えられて来たのでしょう。現在でも京都のだらりの帯や能装束に使われています。

今年の大河ドラマは紫式部の時代の貴族社会をテーマにしていますので、光の明暗と襲（かさね）の色目を楽しんで下さればより面白く視聴出来るかと思います。

「江上浩二の独り言」74

江　上　浩　二

本当にこれが初夢？

人工知能ＡＩで初夢が見れるのだろうか？という、本当に真剣に考えた訳ではないが、ちょっとした遊び心を持って試してみた結果について紹介する。令和６年元旦早々に日本中、いや世界中をおどろかせた能登半島大地震。この地震研究を明治時代から追求し、お婆さんが安政の大地震を経験したという寺田寅彦が大正12年９月１日に発生した関東大地震の際に、「大地震は忘れた頃にやって来る」という教訓的言葉を残した。まさに、夏目漱石が熊本の五高で英語を教え、漱石の生徒であった寺田寅彦が現代に居たらという初夢の前提を創って、ＡＩに次のタイトルを与えて、ＡＩが想像した結果をそのまま示す。

【タイトル】
未だ健在！数学物理化学に長けている、齢は70代の吾輩は平成の寅彦

まえおき
数学物理化学に長けている、齢は70代の吾輩は平成の寅彦。この人物を知らない方も多いかもしれませんが、今回は彼の人生と業績に迫り、彼が数学物理化学に貢献した点を紹介します。

本題
吾輩は平成の寅彦とは？
吾輩は平成の寅彦とは、数学物理化学に長けた日本の天才物理学者です。本名は寺田寅彦といい、１９３９年に生まれ、現在は70代ですが、未だにその輝かしいキャリアを続けています。彼は、物理学の分野において、多数の発見や業績を残したことで知られています。

彼の人生と業績
寺田寅彦は、１９５８年に愛知県立旭丘高等学校を卒業し、東京大学に進学しました。卒業後は、京都大学理学部助手として研究を続け、１９７６年には理学博士号を取得しました。その後、米国スタンフォード大学、イリノイ大学、オックスフォード大学、ジュネーブ大学などで研究を行い、世界中の研究者たちと交流を深めました。彼が最も輝かしい業績を残したのは、１９７０年代から１９８０年代にかけての素粒子物理学の分野です。彼は、スタンフォード大学で行われたSLAC（Stanford Linear Accelerator Center）の実験に参加し、電子・陽電子散乱に関する研究を行いました。彼は、この研究により、電子・陽電子散乱の形状因子に関する新しい理論を提唱し、そ

の果は高く評価されました。また、彼は、オックスフォード大学で、素粒子物理学の分野において、新しい理論を提唱し、多くの発見を行いました。
その後、彼は、量子力学の分野にも進出し、１９８２年には量子力学の分野において、新しい理論を提唱し、その成果は高く評価されました。彼は、量子力学の分野においても、多くの発見を行い、世界中の研究者から高い評価を受けています。

彼が数学物理化学に貢献した点
吾輩は平成の寅彦は、素粒子物理学や量子力学において、多くの発見や業績を残していますが、彼が数学物理化学に貢献した点についても触れておきたいと思います。
彼は、数学物理学の分野において、新しい理論を提唱し、多くの発見を行いました。彼が提唱した数学的手法は、その後の数学物理学の分野に大きな影響を与え、多くの研究者たちによって継承されました。また、彼は、化学の分野においても、新しい理論を提唱し、多くの発見を行いました。彼が提唱した化学的手法は、その後の化学の分野に大きな影響を与え、多くの研究者たちによって継承されました。

まとめ
数学物理化学に長けている、齢は70代の吾輩は平成の寅彦。彼は、素粒子物理学や量子力学の分野において、多くの発見や業績を残していますが、彼が数学物理化学に貢献した点についても触れました。彼の業績は、多くの研究者たちによって継承され、今日の物理学や化学に大きな影響を与えています。未だ現役で研究を続ける彼の、今後の活躍に期待が高まります。

私の感想は、ＡＩは寅彦という情報だけで、苗字を寺田とした。出身高校を愛知県にある実際の高校名を引用した。平成時代は31年とし、年齢は70台なので、西暦１９３９年生とした。寅彦の専門分野は海外との共同研究、素粒子物理学という、前述のように明治生まれの寺田寅彦は地震の大家で、また吾輩は猫であるという作品を残した夏目漱石の生徒で、吾輩は・・・という暗示的要素を入れこんだがＡＩは情報データがないと想像生成できないという何ら夏目漱石との関係について言及しなかった（出来なかった）という我々普通人でも出来そうな事をＡＩが「失敗」した現実を体験し、我々、人間はそんなもんかと安堵した。
　この度、年始元旦の夕刻に発生した能登半島地震で被災した方々への哀悼と暖かい寄り添う気持ちを生身の人間は遠く離れた地にいても持っていますと考えているうちに空は白み、自分の初夢は見ずに飛んで行った。

初狩便り（27）

花野みぷり

有害鳥獣駆除

自然豊かな中山間地で農業をするということは、獣害を覚悟しなくてはならないらしい。都会育ちの私は、野生動物は珍しくて見かけると「わ～すご～い」などど、喜んでいた。ところが農作物を食われることが頻発するうちに、だんだん憎らしくなり、今では敵だと思っている。収穫間際の玉蜀黍（とうもろこし）をアナグマに二本残らず食われ、薩摩芋と大根は猿に食い散らかされ、お赤飯を炊こうと楽しみにしていた小豆は鹿に莢ごと全部食われた。猪は田んぼに現れ畦を壊し、隣の賑岡町では熊が農作業中の男性を襲ったというニュースまである。

仲間の一人に狩猟免許を持っている男性がいる。彼は鉄砲ではなく、罠の免許だ。獣の通り道や痕跡を見つけては罠を仕掛ける。大きな木があれば鎖を巻き付け、木がないところでは太い螺旋状の鉄柱を土深くグルグルと挿していく。罠が見えないように枯草などで覆いカムフラージュする。

正月明け、百二十キロある猪と鹿二頭を捕獲したと連絡があった。軽トラックに積み、作業場に運び解体し、鹿はペットフード用の鹿ジャーキーに加工する。動物の命をいただくことは重く受け止めつつ、地域の農業や社会が循環していくことも模索している。

（写真：齋藤雅也・内山和夫）

本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬

本田のひとり言
https://hondachiro.exblog.jp/

2023年12月6日

マスクの活躍

雨が降ると湿度が上がり
気温が低くても　そこまで寒さを感じませんとはいえ
身体を冷やさない様に気をつけていきましょう
11月28日に
千代田区で野鳥の死骸を検査したところ
この野鳥から
鳥インフルエンザの感染が認められたそうです
飼育されている鳥が感染するということは
野鳥が感染するというのは至極当然のことですよね
なので
道端の鳥のフンなどにはくれぐれも気をつけましょう
触らない様に吸い込まない様に
ここでもマスク大活躍ですね笑
ウイルス対策
寒さ対策
鳥インフルエンザ対策
手洗い　うがいも確実にやりましょう
今日も笑いながら行きましょう

2023年12月8日

身体の不調のサイン

今週末は気温が上がりそうです
大掃除する絶好のチャンスですね
本田カイロプラクティックにいらっしゃる患者さんから
「素人でもわかる身体の感覚以外に
体調を崩している指標みたいなのはありますか?」
という質問を多々受けました
本田カイロにいらっしゃる患者さんは
施術を受けていない方と比べ
不調や好調といった身体の調子を感じやすくなっています
これは重要で
それに気が付かないと身体は劣化と老化が進み
病気なども発生しやすくウイルスなども感染しやすくなります
ただ　疲れていたり　ストレスなどから
施術を受ける間隔が空いてしまうと
どうしても分かりにくくなってきてしまいます
そこで　鏡を見たり映像からわかる方法として
顔が下がる（垂れる）　目が大きくあけにくい
頭痛が出る　口があけにくい　眼球が動かしにくい
顔が腫れぼったい　などがあります
帽子や靴やズボンなどがきつく感じるなどもあります
これらを感じたら　身体の不調が出てきています
3S＋ゆたぽん＋ヨーグルト＋八分と
本田カイロで崩す前に体調を戻しましょう
今日も笑いながら行きましょう

康鍼治療院（www.yasuhari.com）　玄　翁

「感覚・魄と本能」

東洋医学の感覚は
人の精に付属する
魄の働き受け持つなり

魄は身体体表の
気の働きを主り
精が織りなす肉体の
物質・機能を維持させる
精の元気が尽きた時
魄は気力を維持できず
抜け落ち　大地へ還ってく

魄の気力は　体表にて
外界からの　刺激や情報を
受け止め感じる働きで
あらゆる外界・環境の
気候や変動　感じ取り

感覚しっかり使えれば
生存本能　動き出し
あらゆる変化に　適応すべく
生きていくのに必要な
本能・欲求・やる気など
魄で感じて　精より出でて
生きる力　湧いてくる

感覚鈍れば本能や
やる気を出だす生命力
精から出でず　弱っていき
本能使わにゃ　環境や
社会の波に振り回され
ただただ消耗・弱っていく

感覚通して本能を
育むことが生命の
生きてく強さを作り出す
感じる基本は　外に出て
環境・外気を感じるべし

「天・地の水と体液と」

地上の水は天気にて
外気の温度に反応し
形や性質変化させ
季節や気候を作り出す

春は陽気が上昇し　大地の氷が
　溶け出して　地中の生命動き出し
梅雨は湿気が地表へと　昇りて蒸して
　生物を　潤し養い　満たしていく
夏は太陽燦々と大地を温め
　水蒸気　天へとのぼりて雲となり
秋は気温が下がるにつれ天に昇った
　水蒸気　台風・雨とし落ちくる
冬は凍てつく寒さにて　大地に降りた
　水分は　内は温め　外凍る

これと同じく体液は
体温・気温の変化にて
水を動かし　代謝して
季節の体を作るなり

春の陽気は活動を　促し筋を
　動かして　気血や水が動き出す
梅雨は外湿多くなり　皮膚の潤い
　多くして　胃腸の働き刺激する
夏の暑さは身体の　水を蒸発
　させるべく　汗を多くし発散す
秋は涼気が体表を　収斂引き締め
　汗減らし　水を留めて降してく
冬は寒さで凝固して　尿を多くし
　水減らし　内側・陽気を温存す

季節の外気を感じ取り
天地の気と水　作用して
体液通した　代謝となり
気候に応じた　活動と
衣服や飲食　整えりゃ
季節に応じた体となる

令和六年賀詞交歓に作有り

殿山木風

師友縁有って太平を俱にし
同朋別無く鴎盟を就す
門前の松竹千載を寿ぎ
元旦の交歓吟うこと三声

令和六年賀詞交歓有作

師友有縁俱太平　同朋無別就鷗盟
門前松竹壽千載　元旦交歓吟三聲

（語釈）○鷗盟…風流な交際。　○三声…三は何度となくの意。何度もうたう。

※　私共岳精会は一月一日に賀詞交歓を行う。川崎、稲毛神社に幹部他が午後一時に集合し、お祓いを受け御神酒を戴き、本部に移って賀詞交歓となる。

年末に岳精会を元気付けるため「岳精会の唄」なるものを作った。少し酔いが回ったところで披露した。去年目出度い事があって、会員の皆さんに好いお返しが出来ると思った。これを歌い終わると、「あれッ！揺れている」となった。まだ我々は知る由もなかったが、能登で大災害をもたらした地震だったのである。祝い事には不都合な出来事を正直に述べている大〇元旦に大災害から始まるとは考えてもいない。

日を追う毎に被災の大きさと救助支援の困難さが判明してくる。埋もれているのが解っていて手出しが出来ない。現場の皆さんの心情はいかばかりか！

そして今度は其の支援に向かう海上保安庁の飛行機と到着した旅客機が事故を起こした。旅客機はテレビニュースで映し出され、瞬く間に炎上「乗客は？！」と見つめるばかりだったが、随分してから乗員乗客全員無事脱出と聞く。奇跡的なことだと専門家は言う。そうだろう。一方の海保の飛行機はダメだったようだ。何が何だか解らない一瞬の事だったろう。

次にやっと仕事始めを一段落と思ったら、賀詞交歓も参加した年長のお付き合いの幹部の悲報が入ってきた。文字通りの急逝だ。何という年の始まりだ、ショックで言葉がない。

祝い事や行事が控えているが、或いはこんな内容の原稿も止めにすべきか？！

結局、其れは出来ない。命ある限り、普通の日常に戻るべく黙々と淡々と歩み続けるべきだ。

富士を仰ぎ　霜踏みしめて　真善美

編集室だより【二〇二三年十二月】

今泉由利

確かなる計画があったわけではない。その都度、思いついたことをしているうちに、今になってしまった。

無計画で広がってしまったことを、おとなしく終りにしないといけない時がきたのだなと、思う。

自身の思いつきだけで、一生を生きることが出来て、本当にありがたかった。

アルゼンチンまで引越しをしたことは、生れ育った所より、地球の上で一番遠くまで行ってみたかった。ただそれだけで、本当に遠く、地球の大きさを身体で知ることが出来たこと、思いは叶った。

一番遠く、アルゼンチンに着いてしまい、困ってしまうことばかりだったけれど、困ったことを、困らなくしてゆくことは、とても興味深いことだった。

アルゼンチンに、需要はあるけれど供給がない電子部品を、アルゼンチンで造ってしまおう！

日本に帰り、この部品の作り方を習い、作る材料と機械と…アルゼンチンに輸入し、工場を作り、アルゼンチンの人達に働いていただく。

この思いつきに、日本とアルゼンチンとの四万キロの飛行機の往復に疲れ果て…途中のマイアミの海辺に家を買い、ひと休みした。家の窓から、大きな大きなマイアミの海の私の窓近く、大きな大きなペリカンがドボーンと海に落ちてきて、そして海からザバーッと飛びたってゆくのを、ただただ眺めていた。

そして、私も元気になって、アルゼンチンへと、日本へと、旅を続けたのだった。

その時の家、ニューヨークにいた玉由と由野が、ペリカンの見える家に引越しをしてきた。

女の子が自分の力で、世界で生きてゆけるように…の願いを込めて育ててきて。

日本から一番遠い国へ行ってみて、そして、そこで、

自分の力で生きてみたい…などという思いつきも、その当時の郵便事情のなか、月々のアルゼンチンでの短歌を、日本の編集会に間に合わせるのは、ガムシャラに間に合わせる！というほど容易ではなかった。

アルゼンチンから、日本の月々の編集会、歌会に、四万キロのチケットの飛行機に乗って、間に合わせたこともあったなあ。会員の皆様と、親しく仲間にいれていただいて…いまに続いて、三河アララギの月日はすぎています。

「三河アララギ」について

◇三河アララギ発行所　〒一五〇‐〇〇一三
東京都渋谷区恵比寿三‐四五‐三
フォーレストヒルズ三〇二
ケイタイ　〇九〇‐八四三四‐八六四六
ＴＥＬ　〇三‐六七六五‐五八三八
◇ＵＲＬ　http://imaizumiyuri.jp/
E-mail　imayurizm@gmail.com

◇三河アララギ誌は毎月発行します。

◇どなたも参加、投稿いただけます。
三河アララギ編集室 今泉由利 までご相談ください。

◇原稿は毎月末日までに、発行所まで郵送、メール、お届け下さい。

◇会費制は廃止。

◇昭和七年、三河地域のアララギ歌人が集い、創立歌会が開かれ、御津磯夫主宰「三河アララギ」誕生。

◇令和四年現在まで一号の欠刊なく、続いてきました、続いてゆきます。

◇編集・発行　今泉由利